

第2回

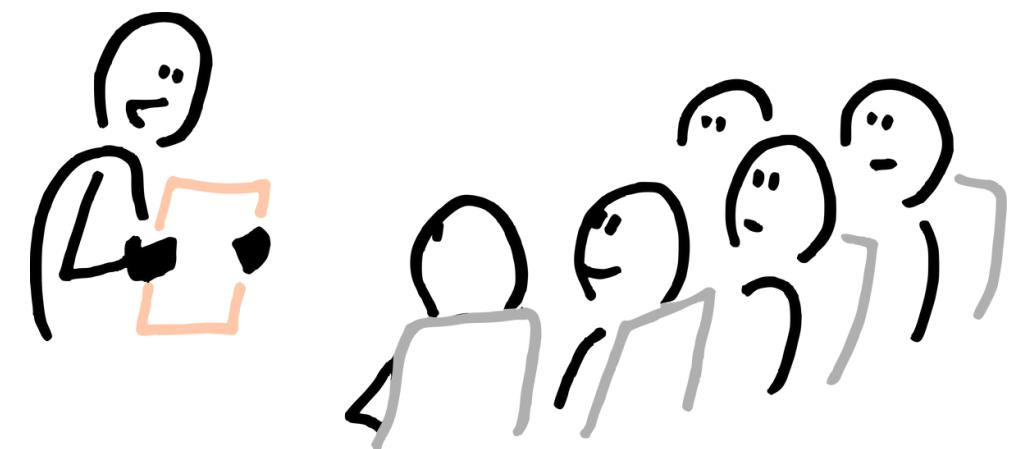
保護者対象の地域対話



まんなかに愛のあるまち
CHINO
茅野市

1

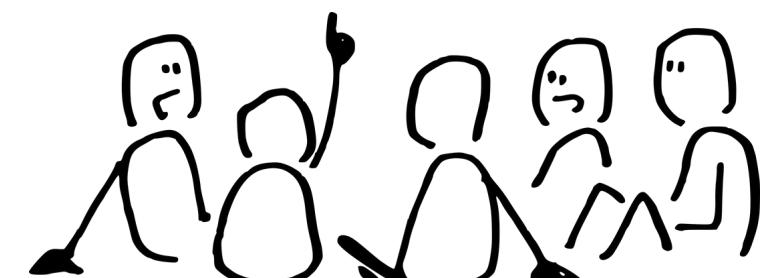
第1回 「保護者対象の地域対話」 についての報告



1回目の参加状況

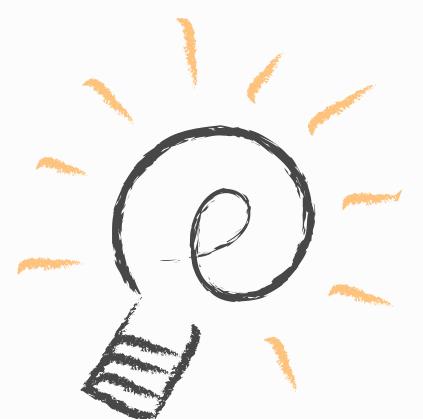
4月15日現在

	参加者	アーカイブ配信
永明小学校区	6名	4回
宮川小学校区	12名	7回
米沢小学校区	15名	29回
豊平小学校区	6名	16回
玉川小学校区	9名	12回
泉野小学校区	50名	85回
金沢小学校区	21名	36回
湖東小学校区	6名	9回
北山小学校区	12名	69回



対話で寄せられた考え方

- ・小規模特認校制度（特色を出して学校を残していく）
- ・学区を中学校区に広げ、大規模学校と小規模学校を選べる選択制
- ・学校を選べる制度（男女比が偏った場合や学校との距離によって）
- ・施設の複合化（「学校と保育園」「学校とコミュニティーセンター」）
- ・本校 + 分校（低学年と高学年で校舎と教育方針変える）
- ・現在の中学校単位に小学校を集約
- ・市内中心部の施設をシェアするサテライト型のスクール



対話でご提案いただいた具体的な教育環境

程よいクラスの
人数は25~30人

1クラス20人で
2学級

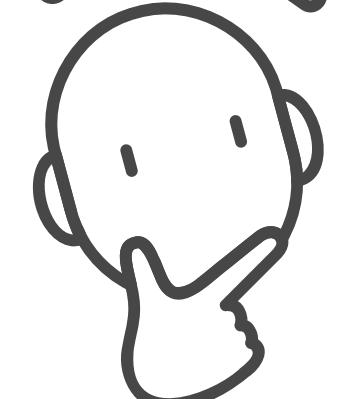
地域に素敵な大人
がいることが魅力

100人規模にして
学校数を増やす

30人超だと
多くの意見が出るが
処理できていない

地域の人や異年齢の人
とのかかわり大事

単級
人間関係が崩れた時
逃げ場がない

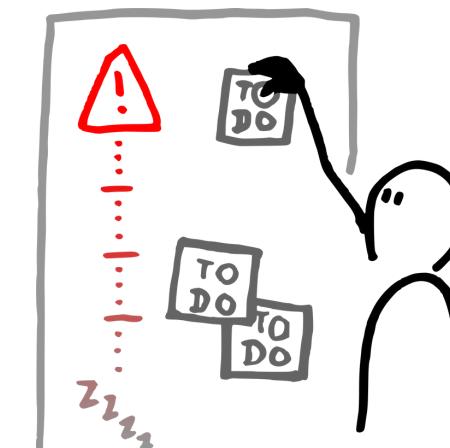


市への要望

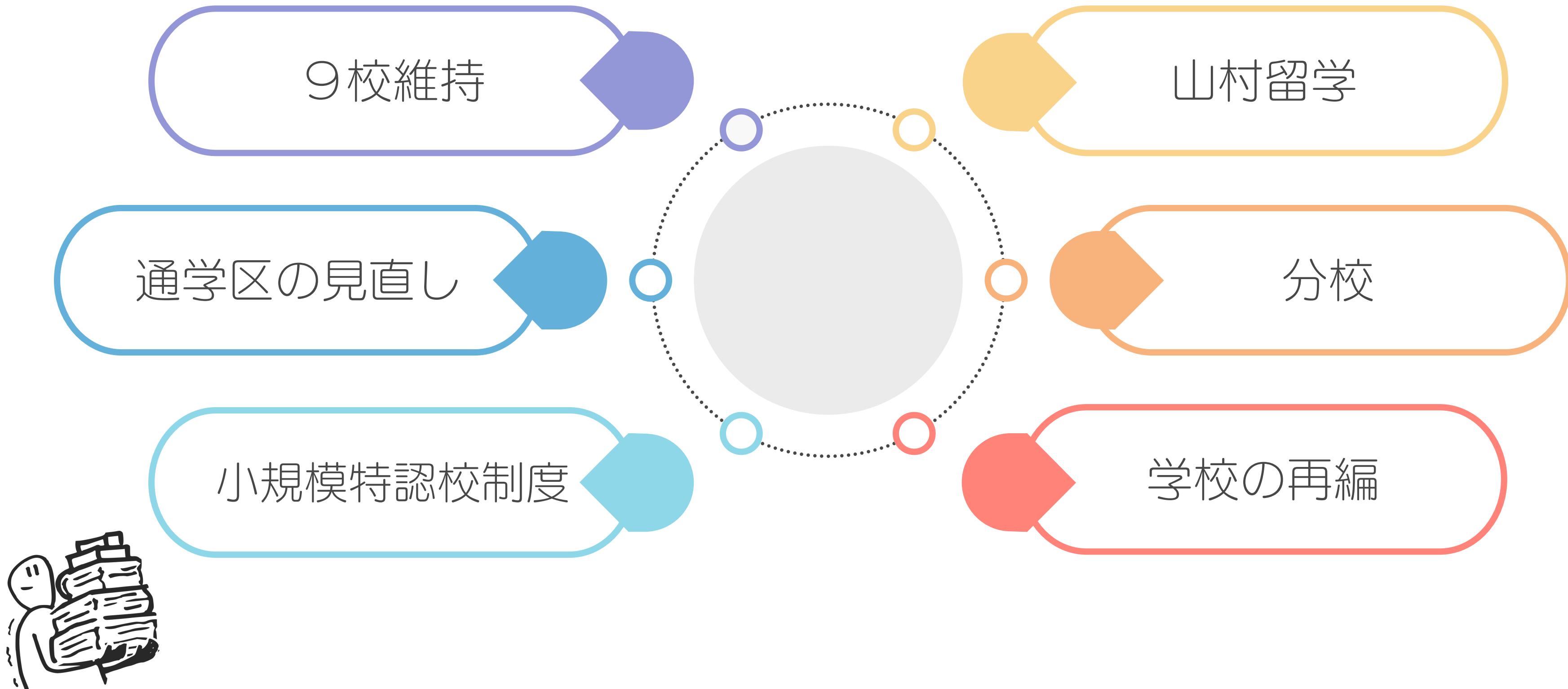
- ・9校維持、特認校制度、分校など様々な選択肢を出して検討を進めてほしい。
- ・建替え経費、児童数減少のメリットデメリットなどの資料を示してほしい。
- ・他市町村の事例を共有してほしい。
- ・財政の状況を教えてほしい。
- ・子どもや教員の意見も聴いてほしい。
- ・地域対話で出た意見が全ての地域の意見と捉えないでほしい。

2

地域対話で寄せられた意見から
考えられる**6**つのパターン



6つのパターン



パターン①-1 「9校維持」

【茅野市】

現在、9小学校（合併前の1町8ヶ村にそれぞれ小学校）がある。



南砺市ホームページより抜粋

【事例】富山県南砺（なんと）市

- 合併前の4町4村には学校機能を1校ずつ維持。
- 学校の統合は、同一校区で小中学校を統合し義務教育学校にするか、隣接中学校を統合する。
- 地域ごと協議組織を設置する。
- 約5年ごとに学校統合の方向性を協議する。

パターン①-2 「9校維持」

【課題への対応】小規模となる教育環境への対応

- ・チーム担任制
- ・地域基盤の小中一貫教育

南砺市内小・中・義務教育学校における「チーム担任制」について

令和6年1月改訂(令和2年3月作成)
南砺市教育委員会
南砺市教育センター

例

本市では、令和2年度より全ての市内小・中・義務教育学校において、従来の「1学級1担任制」を見直し、複数の教員が学年全体や複数の学年を指導・支援する「チーム担任制」を導入しています。具体的な取組は各学校において校長の指導のもと、実態に応じて柔軟に実施されています。

<小学校 単級・複式学級の場合>

以前は学年ごと
福光南部小・上平小
南砺つばき学舎（前期課程）
利賀学舎（前期課程）

- 人数が増えることで、多様な意見にふれることができます。
- 6年間ずっと同じメンバーで過ごすといった、生活集団の固定化を防ぐことができます。

2学年合同で、各教科の得意な教員が中心となって指導します

- 2学年合同で行うことでき、音楽科の合奏や体育科のボールゲーム等の学習が日常的に可能になります。

<小学校 学年複数学級の場合>

以前は学級ごと
井波小・城端小・福野小
福光中部小・福光東部小

- 複数の教員が協力して指導することにより、どの学級でも質の高い授業を実施できます。
- 生徒指導上の問題や子供たちの相談にも、複数の教員がチームで対応します。

学年全体の指導と各学級での指導を組み合わせます

<例1> 授業の導入部分を学年全体で行い、活動は学級や学年で実施するなど組み合わせて指導します。

<例2> 教科担任制を取り入れ、教員が得意な教科を両方の学級で指導します。

<例1> 学年全体で
5年1組
5年2組

<例2> 理科を指導します
社会科を指導します

南砺市ホームページより一部抜粋

パターン①-3 「9校維持」

《メリット》

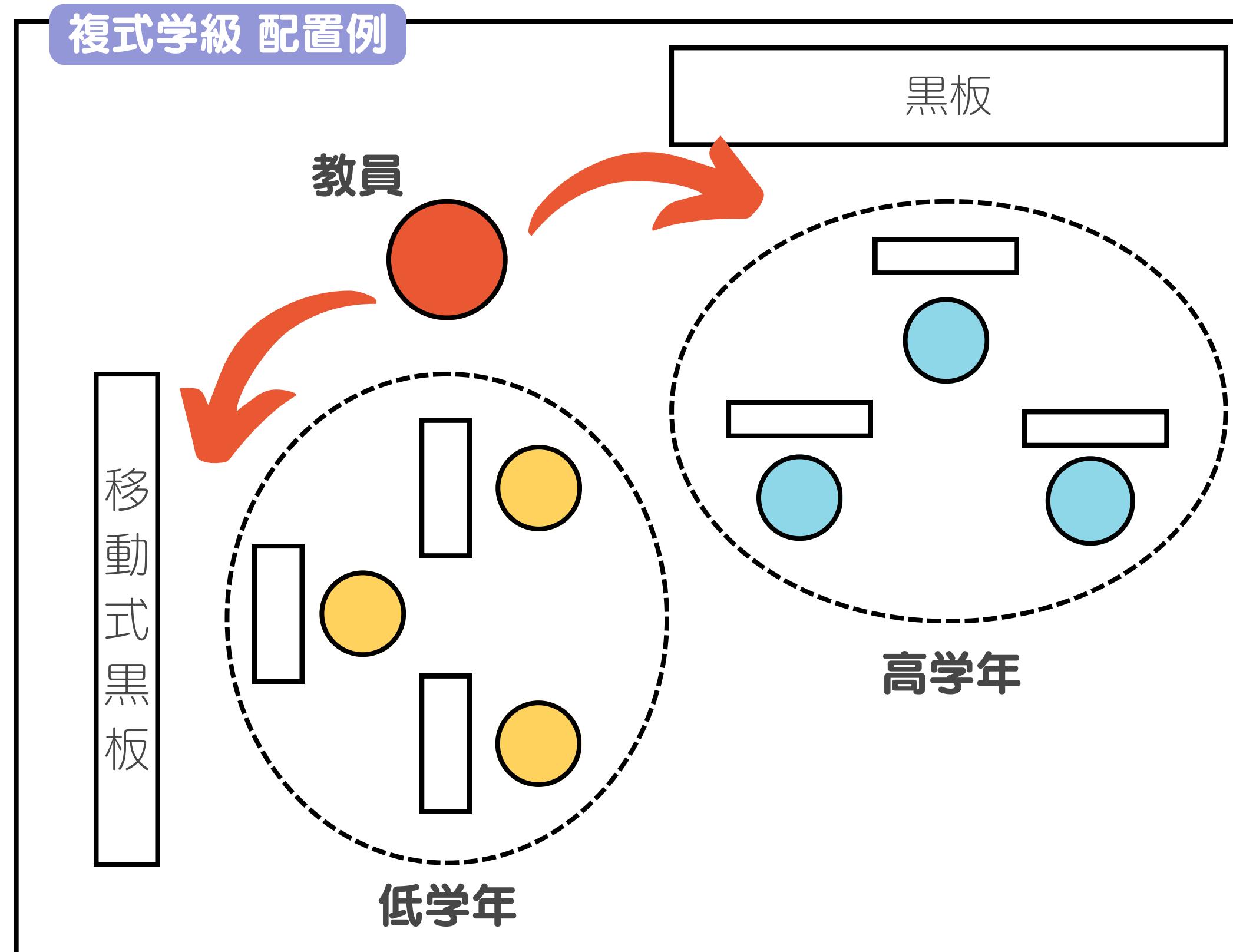
- ・地域に学校機能を残すことができる。
- ・小規模のきめ細かな指導ができる。
- ・チーム担任制等の取り組みをした場合、教師の専門性を生かした指導や学年・学校全体を見渡した学校経営がしやすい。

《デメリット》

- ・1学年の人数が一桁になったり、複式学級※が生じる懸念がある。
- ・築40年を超える校舎が多く老朽化が進んでいるが、建て替えや大規模改修の長期計画が必要となる。一定の築年数を超えた場合でも、複数の学校の建て替え等を同時期に行うことは難しい。

※12~13ページ参照

複式学級について①-1



- 引き続く2つの学年の児童生徒数の合計が8人以下となる場合、複式学級となる。
- 1つの教室で2学年が一緒に授業を受ける。
- 教員が2つの学年を行き来しながら授業を進める。
- 他学年を指導している間、子どもだけで学習をすすめる間接指導も行われる。

複式学級について①-2

《メリット》

- ・異学年との関わりによりお互いに学びあう環境が作れる。
- ・協力や助け合いの意識がはぐくまれる。

《デメリット》

- ・間接指導が多くなる（実験等に制約）
- ・グループ活動や協働的な学びに制約が生じることがある。
- ・専科教員の配置がない。
- ・グループ学習や習熟度別指導など多様な指導形態が行いにくい。
- ・教員も少人数となり経験や教科などバランスの取れた配置がしにくい。
- ・少人数のため社会性を育みにくい。

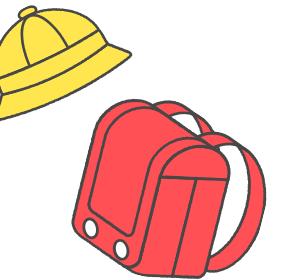
パターン②-1 「通学区の見直し」

【事例1】長野県松本市



- ・通学距離を理由とする指定校変更を認める。(通学区域制度の弾力的運用)
- ・運用後、子ども達と地域との関係の希薄化、地域の子ども同士の繋がりの希薄化について検討された経緯がある。

【事例2】新宿区四ッ谷地区



- ・児童数が増加し増築をしている学校がある一方、単級となっている学校が存在している。区立小学校の教育環境の維持向上を図るため、学区の見直し検討を進めている。

パターン②-2 「通学区の見直し」

《メリット》

- ・現在通学している学校より近くに学校がある場合は、通学距離が短くなる。
- ・通学区域制度の弹力的運用とした場合は、柔軟な対応が可能。（通学距離・男女比等）

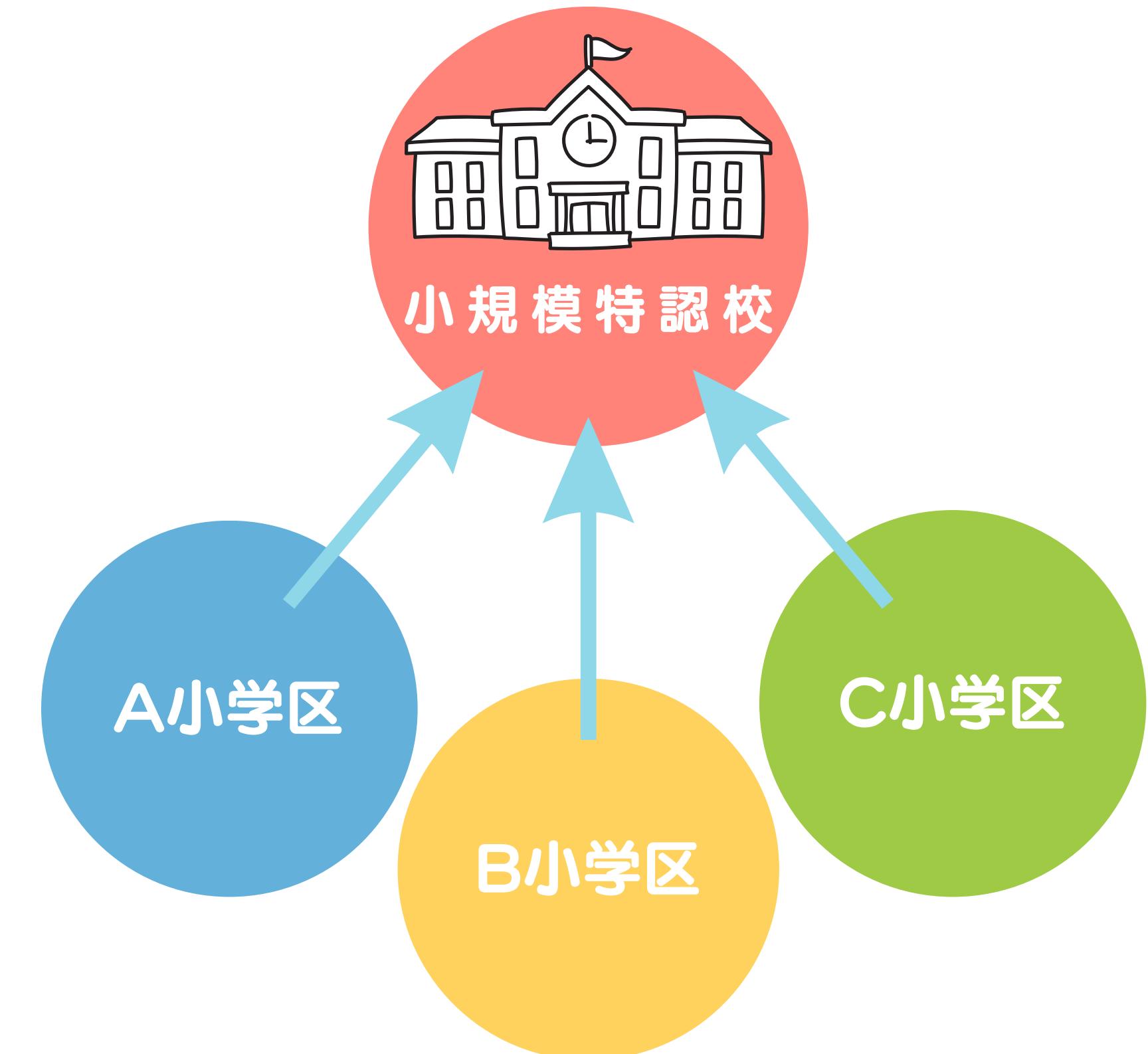
《デメリット》

- ・学区をまたいで保護者や地域の理解が必要。
- ・人数の平準化を目的とする場合は、市内全域で検討が必要。
- ・地域の歴史的経緯や住民感情など十分に考慮が必要。

パターン③-1 「小規模特認校制度」

「小規模特認校制度」とは…

小規模特認校制度は、小規模の特徴を生かした学校運営を希望する保護者や児童に、通学区域外からの通学を認める制度。



パターン③-2 「小規模特認校制度」

【事例 1】伊那市立新山小学校

(令和6年度)

児童数46名、制度利用者8名

- 平成21年度～ 小規模特認校制度開始
- 地域全戸（200戸）がPTAに加入。
- 児童と地域が相互に高めあうことを目標に活動。
- 令和7年度から近隣小学校と遠隔授業の実施や行事共同で開催。



パターン③-3 「小規模特認校制度」

【事例2】大町市立八坂小中学校 (義務教育学校前期課程)

(令和6年度)

児童数49名 制度利用者6名・山村留学9名

- ・特認校制度利用者や山村留学生も地区の子ども会に入り、地区行事に参加する。
- ・令和6年度は特別支援入級者が増えたためコンテナで特別支援学級を増設して対応。



パターン③-4 「小規模特認校制度」

《メリット》

- 学校の特性や小規模の良さを活かす学校運営。
- 少人数できめ細やかな指導ができる。
- 複式学級の解消になる可能性がある。
- 地域が関わり子育てを支援する必要性がうまれる。

《デメリット》

- 学区外通学する児童の通学距離が長くなる。
- 男女比のかたよりが解消できない場合がある。
- 支援学級の定員を超える場合は、制度利用を断るケースもある。
- 地域との連携を継続できる体制を作る。

パターン④-1 「山村留学制度」

「山村留学」とは…



都市部の子どもたちが自然豊かな農山村地域の共同宿泊施設や農家などで暮らし、地元の学校に通いながら、自然体験や生活体験をする取組。

パターン④-2 「山村留学制度」

【事例】長野県南相木（みなみあいき）村

（令和7年度）

児童数53名

その内、制度利用者18名（主に関東圏から）

- 人口1000人。「1/1000の留学」
- 令和2年度から親子留学の受け入れ。
- 原則、4/1～3/31の1年間。
- 体験入学をしてもらってから、留学申請を受け付ける。



パターン④-3 「山村留学制度」

《メリット》

- 都市部と地元の子が互いに高めあう相乗効果がある。
- つながり人口の増加。
- 地域の活力創生につながる可能性がある。
- 制度利用後に定住する人もいる。

《デメリット》

- 地域の受け入れ体制が必要。
- 居住場所の確保。
- 児童数を増やしたい受け入れ側と豊かな教育環境を求める留学生側とのミスマッチが生じやすい。

パターン⑤-1 「分校」



分校とは…

本校から遠い所に住む生徒・児童が通学する
ために、本校から離れた所に設けた学校。

県内にも分校は残っているが、多くの分校が
閉校・休校となっている。

パターン⑤-2 「分校」

《メリット》

- 通学距離が短くなるため、体力的・時間的に負担が少ない。
- 少人数だとより丁寧な指導を期待できる。

《デメリット》

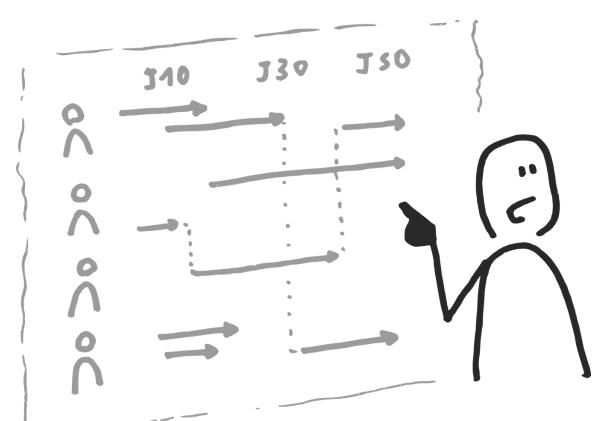
- 校長・教頭・養護教諭・事務職員は本校と兼務。
- 兄弟姉妹で違う校舎に通う場合がある。
- 少人数だと共に話し合い学ぶ経験を持ちにくい。
- 行事など本校と分校のすり合わせが難しい。

パターン⑥-1 「学校の再編」

【事例】富士見町立落合（おちあい）小学校

平成23.3月 落合小学校閉校→富士見小学校、境小学校に統合

- 平成26年度から複式学級が恒常に継続する推計となり、教育・学習環境の格差を是正するため統合。
- 地域の要望により、通学の安全を図るため富士見小学校へはスクールバスを必須とした。
- 統合を進める中で、地域から心配の声が寄せられたが、保護者の多くが統合を望んでいたことで統合が進んだ。
- 現在は、富士見小学校へ約20名スクールバスで通学。



パターン⑥-2 「学校の再編」

《メリット》

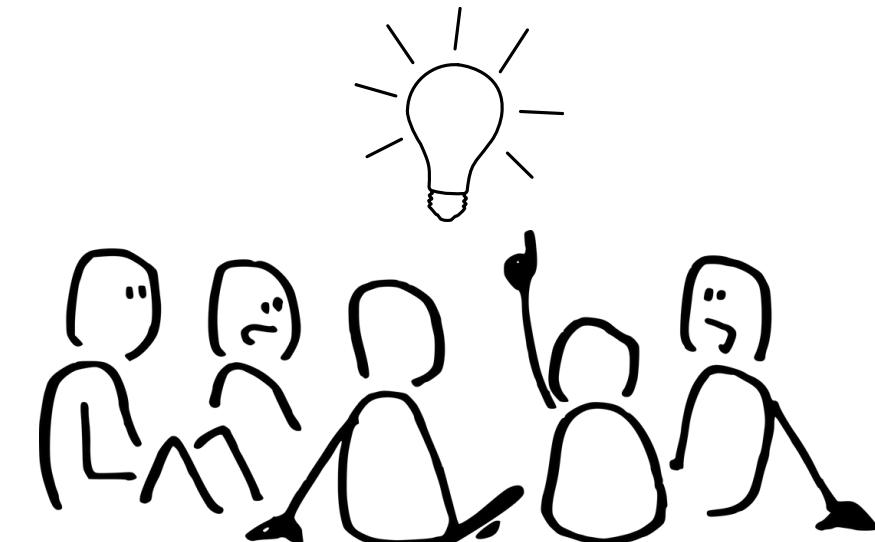
- 複式学級、男女比のかたよりの解消。
- 多様な指導形態の実施。
- 建て替え費用の削減。
- 一定の児童数を確保できるので、国や県から加配を受けることができる。

《デメリット》

- 再編のはじめの段階では、環境変化に伴う子どもたちへの負担がある。
- 通学距離が遠くなる。
- 学校と地域との関係性の希薄化。

3

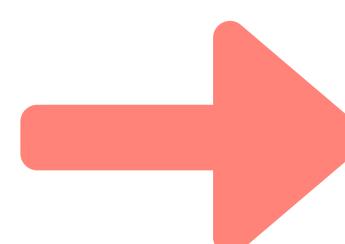
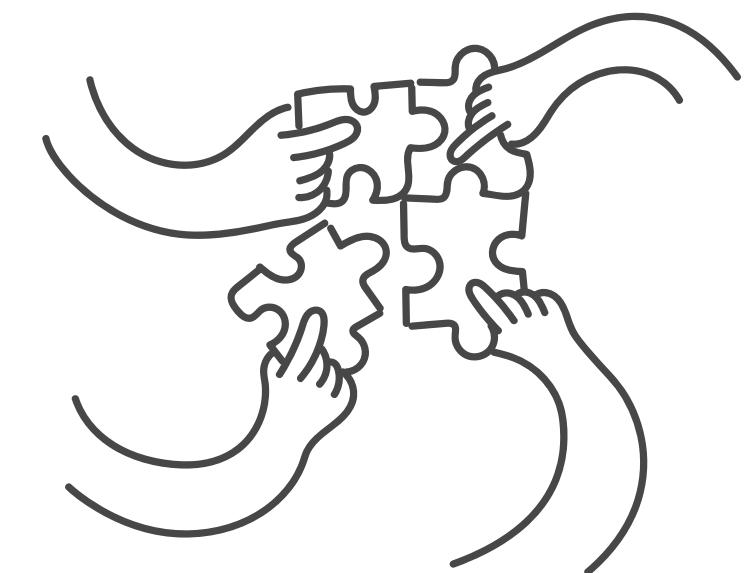
保護者のみなさんとの 地域**対話**



教育環境を考える

保護者のみなさんはどう考える？

- 未来の子ども達の教育環境を考える
- 地域にあったパターン
- パターン同士の組み合わせ
- 新しいパターン



保護者の意見を示しながら
地域全体の地域対話を進める



4

事務連絡と 今後のスケジュール



資料とアンケート

本日の資料（電子版）

本日の資料の電子版は下記URL、またはQRコードからご確認いただけます。



https://chinoed-my.sharepoint.com/:b/g/personal/t000000sc11_chinoed_onmicrosoft_com/Ed-6aieteDVJsENsY4IL6pMBjH-2y2vn_5MIZhwBaMYVZg?e=hDWJeN

アンケートフォーム

ご意見や質問のある方は下記URL、またはQRコードからご回答ください。



<https://logoform.jp/form/tKkC/995248>

地域全体の地域対話の日程

地区	開催日	時間	場所	
ちの地区	6月30日 (月)	19:00～20:30	茅野市役所	8F大ホール
宮川地区	7月3日 (木)		茅野市役所	8F大ホール
米沢地区	7月8日 (火)		米沢小学校	体育館
豊平地区	7月11日 (金)		豊平小学校	体育館
泉野地区	7月14日 (月)		泉野小学校	体育館
玉川地区	7月16日 (月)		東部中学校	体育館
金沢地区	7月22日 (火)		金沢小学校	体育館
湖東地区	7月25日 (金)		湖東小学校	体育館
北山地区	7月29日 (火)		北山小学校	体育館
中大塩地区	8月1日 (金)		北部中学校	やつがねホール

